

耐震診断結果の見方

- ① 耐震診断結果の「耐震診断結果の方法の名称」を確認し、附表の「耐震診断の方法の名称」の中から同じ耐震診断の方法を探します。
- ② 耐震診断結果の「構造上主要な部分の地震に対する安全性の評価の結果」を附表のどの区分に該当するかを確認します。
- ③ 該当する部分の区分の安全性を確認します。
- ④ 安全性の区分Ⅲ「危険性が低い」は、現行の耐震基準に相当するものです。これを下回ると区分Ⅱ「危険性がある」、区分Ⅰ「危険性が高い」となります。いずれの区分も震度6強から7に達する大地震に対する安全性を示したものです。

耐震診断結果公表
要緊急安全確認大規模建築物

○学校(小学校、中学校、特殊支援学校)

No.	建築物の名称	建築物の位置	建築物の用途	耐震診断の方法の名称	構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価の結果	耐震改修等の予定		備考
						内容	実施時期	
1	〇〇市立〇〇小学校	〇〇市〇〇一丁目1-1	学校	(一財)日本建築防災協会による「既存鉄骨造建築物の耐震診断指針」(1996)	Is= 0.70 q= 1.17			Is=0.7
2	□□市立□□中学校	□□市□□二丁目2-2	学校	(一財)日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」(2001)	Is/Iso= 1.04 C _{TU} S _D = 0.74			Is=0.7
3	宮城県立△△支援学校	△△町字△△3	学校	(一財)日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」(2001)	Is/Iso= 1.02 C _{TU} S _D = 0.76			Is=0.7

耐震性能目標を割増したもの

① 同じ名称を探す。

② 結果の該当部分を探す。

附表 耐震診断の方法の名称と構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価

いずれの区分に該当するにあいなくても、違法に建築されたものや劣化が放置されたものでない限りは、震度5強程度の中規模地震に対しては損傷が生ずるおそれは少なく、倒壊するおそれはない。

耐震診断の方法の名称	構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性		
	I 大地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高い	II 大地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性がある	III 大地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い
(一財)日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(1977年版)	Is/Is0 < 0.5	左右以外の場合	1.0 ≤ Is/Is0 かつ 0.3 ≤ C _{TU} ・S _D ≤ 1.15
(一財)日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(1990年版)	Is/Is0 < 0.5 又は C _{TU} ・S _D < 0.15		1.25 < C _{TU} ・S _D
(一財)日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2001年版)	Is/Is0 < 0.5 又は C _{TU} ・S _D < 0.15・Z・G・U ※Z・G・U=1	左右以外の場合	1.0 ≤ Is/Is0 かつ 0.3・Z・G・U ≤ C _{TU} ・S _D ※Z・G・U=1

③ 安全性区分を確認

④ 区分の意味を確認

- I 震度6強から7に達する程度の大地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高い
- II 震度6強から7に達する程度の大地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性がある
- III 震度6強から7に達する程度の大地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い

用語の説明

「Is」 「GIs」 : 構造体の耐震性能を表す指標 (この値が大きいほど耐震性能が高い)

「Is0」 : Is値の判定基準となる目標値 (一般的には0.6だが、それ以上の場合には備考欄に記載)

「Is/Is0」 : Is値が目標を上回るかを確認したもの。多くの診断方法はこの結果で判断する。

「q」 「C_{TU}・S_D」 「C_{TU}・S_D」 : 構造体の粘り強さ、建物の平面・立面形状から求められる指標 (この数値が大きいほど耐震性能が高い)

「Z・G・U」 : Z地域特性 (地震活動等), G地盤特性 (地形等), U建築物重要度等から目標値を補正するための指標 (補正が無い場合は1.0となる)